=市史編さん便り=　【13 号】　令和 5 年 6 月 19 日(月)発行.
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊土佐清水市教育委員会生涯学習課・市史編さん室

土佐清水市の民俗伝承(1)「中浜獅子舞」

市史編集委員　岩井　拓史

中浜は足摺半島西岸に位置し、漂流の後アメリカに渡り、日米の架け橋となった中浜万次郎（1827―98）生誕の地として知られる。

昭和 30 年代に本市の文化財保護審議会委員を務めた高木啓夫の著書『土佐の芸能』によると、高知県内の民俗芸能は、花取踊りやこおどりなどの「念仏系」と神楽や獅子舞などの「神道系」に大きく分類される。県全域に広がる念仏系芸能に対し、神道系芸能は山岳信仰と深い関連があるのか、主に中山間地域に分布する。その中でも獅子舞は希少かつ県中部・東部に偏在しており、沿岸部に位置する土佐清水市内では、他の芸能と類が異なるといえるだろう。

この中浜獅子舞は、中世が始まりとの伝承がある。

中村入国後、一円支配権を確立した一条教房（1423―80）を継いだ次子・房家（1475―1539）は、土佐一条家の始祖として幡多本荘中村の小京都化を図った。房家は年中行事のひとつとして、京都祇園祭にちなみ、毎年 6 月 14 日を「祇園の夜参り」と称し、足摺岬・金剛福寺への参来を始めた。当時のヘンロ道は難渋を極め、徹夜の往復でありながらも各地で接待が催された。その楽しみは格別のものであった。中村における休息所は、通称・白滝で行われ、土地の庄屋はじめ地区総出で労をねぎらった。特に、青年の獅子舞は好評を博し、毎年欠かせぬもののひとつであったと伝えられた。

この伝承に基づき、昭和 29 年（1954）9 月の秋祭りを機に獅子舞が計画された。当時中浜に在住していた山下松次が、自分の故郷である香川県の獅子舞を教え、地元の青年団が中心となって初めて奉納された。

現在は少数ながらも中学生や高校生が担い手となって正月に家々を回り、一陽来福や無病息災を祈願する。昭和 50 年頃までは近隣の漁村から漁招きとして招待されていた。

なお、同じ半島地区である松尾にも獅子舞が残っている。由来は定かではないが、現在は隔年の 1 月 2 日に行われている。地元の消防団員が担い手となり、要望があった民家を訪問して舞を披露する。

かつては中浜獅子舞を越地区の青年団が習得して始めたが、現在は途絶えている。

■伝承組織　　中浜地区
■実施期日　　毎年 1 月 3 日
■実施場所　　音鳴神社・地区内各戸

「真念庵の物語(1)」　市野瀬住・六左衛門建立手水鉢

左は、真念庵境内の堂舎前に配置されている手水鉢の採拓中の手水鉢である。

銘には、「南無大師遍照金剛　奉寄進土劔幡多郡市野瀬村六左衛門之　為父母六親　施主　貞享三丙寅三月廿一日」とある。

貞享三年(1686)3 月 21 日に真念庵が所在する市野瀬村の五人組組頭である六左衛門が亡き父母や親族の追善供養のため建立した手水鉢である。

砂岩製で形状は正面横から見ると逆台形を呈し、楕円形の水盤を丞面に穿つ。『高知県史』「近世編」所収の史料では、市野瀬村組頭の六左衛門が市野瀬村で行き倒れた遍路を保護し、看病したが亡くなり庄屋に届出もせず埋葬した。これを咎められて三日間の籠舎に処せられている。

『新市史』の動き

『新市史』「資料編」では、文化財保護審議会副会長で土佐清水市ジオの会・富田無事生会長の提案を受け、最終の第六章に郷土料理の章をもうけました。

第六章　郷土料理
　第一節　カツオのたたき　・・・・・[執筆]市史編さん室職員　吉本工心
　第二節　魚の干物・・・・・・・・・・[執筆]執筆協力員　新野　大
　第三節　土佐清水市の寿司
　　一　ツワ寿司・・・・・・・・・・・[執筆]編集委員長　田村公利
　　二　下ノ段のおしぬき・・・・・・[執筆]編集委員長　田村公利
　　三　姿寿司・・・・・・・・・・・・[執筆]執筆協力員　新野　大
　第五節　貝ノ川ブリうどん・・・・・・・[執筆]編集委員　岩井拓史

高知県立足摺海洋館 SATOUMI・新野大館長、中央公民館・岩井拓史館長に多くの執筆をお願いしており、7 月中に原稿があがる予定です。楽しみにしてください。